

会話のやりとりが気になる幼児についての一考察

——コミュニケーション・パターンが伝えるメタ・メッセージの検討——

野田 淳子¹ 坂田 知津江²

本研究の目的は、会話のやりとりが難しいとみなされていた5歳男児・A君のコミュニケーション・パターンと、それが持つ意味を検討することである。他者との会話におけるA君の応答を観察し、ターン・テークと応答内容の関連性という観点から検討した。その結果、A君はほとんどいつも他者の発話に応答ターンを返していたが、特に他者からの要請に対しては関連性の低い応答を行う傾向が見られた。したがって、A君は相対的に他者の要請の意図に関心を向けていないように思われる。この特徴的な応答パターンが持つ意味について、A君が伝えたかったメタ・メッセージと、聞き手が受け取るメタ・メッセージという2つの観点から検討した。その結果、話し手の意図と関連性が低いA君の応答は、話し手からは協調的でないと解釈されるが、A君自身は他者とコミュニケーションを続けたいという意図を持って応答を返していることが推察された。さらに、このような応答タイプの子どもと関わるうえで、応答を正して適切な言い回しをさせることにのみ重きを置かず、楽しくやり取りを続ける機会を増やしていくことの重要性が示唆された。

問題

近年、保育の現場では対応の難しい子どもが目立つという話をよく耳にする。こうした子どもたちは、保育や研究の文脈では「ちょっと気になる子」と呼ばれる。なぜ気になるのかという問題を考えるうえで注目したいのが、子どもの特徴を「やりとり」のなかでとらえる視点である。藤崎ら³⁾は、保育場面でやりとりをしても通じ合えたという実感を持ちにくい子どもに焦点を当て、気になる原因を子ども自身のなかを求めるのではなく、子どもを取りまく状況を含むやりとりの問題としてとらえている。実際、気になる原因が子ども自身にあるのか、あるいは周囲の関係や環境にあるのかを特定することは難しいし、発達を両者の相互作用ととらえるならばあまり意味がない。しかしその一方で、基本的な意味では子どものありようを受容しながらも、やりとりが難しい子どものメッセージを具体的にどう読みとって、どう返したら良いのかということに、多くの保育者は悩むのではないだろうか。

野田・深田⁴⁾は、保育者の子どもに対する認識やねらいと、保育場面でみられる子どもの姿との間に生じる

“ずれ”が、保育者の子ども理解のみならず自己理解をもうながすきっかけになることや、こうした“ずれ”を理解につなげるための支援として、保育者と子どものやりとりを記述することの意義を論じている。つまり、気になる原因やそこでの対応を考える以前に、その子なりのコミュニケーション・パターンを取りまく関係や状況のなかでとらえることによって、その特徴的なコミュニケーション・パターンが持つ意味を、本人と周囲の者双方の立場から検討することが重要ではないかと考える。そこで本研究では、担任保育者が「会話が一方的で、相手の話や気持ちに耳を傾けることが難しい」ために気になるとした幼児A君について、これらの問題を考えてみたい。

A君は幼稚園の年中児クラスに4月から通っており、本論で検討する3学期の時点では5歳6ヶ月であった。担任保育者は、1学期末のA君について「話し方や感情の表わし方などの行動面で、やや幼さが見られるものの、正義感が強く思いやりがある」ととらえていた。しかし、2学期末には「会話が一方的で、親切なところもあるがマイペースな面が目立つ。せめて必要な場合には大人に対して、相手の話や気持ちに耳を傾けられるようになって欲しい」と述べていた。

キーワード：コミュニケーション・パターン、話者交代、応答の関連性、メタ・メッセージ、幼稚園児

1 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

2 愛媛大学教育学部附属幼稚園

A君との会話のやりとりについては担任保育者のみならず母親も同様な気になる点を挙げていた。その背景には、たとえば大人からの簡単な指示や質問に応じずに話が飛ぶことがあったり、仲間とのごっこ遊びの中で突然かんしゃくを起こすといったA君の姿が、同年齢集団のなかで目立つようになったということがある。なお、A君は地域の乳幼児健診等では特に問題を指摘されたことはなかった。

こうした状況から、A君との会話では日常的にやりとりを続けることが難しい場面が見られるのではないかと思われる。会話が成立しにくいという特徴については、“語用論”の視点からとらえる見かたがある³⁾。語用論とは、会話のやりとりという社会的な文脈における言葉の用いかたの問題を取り扱う⁴⁾。すなわち、円滑に意図を伝え合うために、話し手は聞き手に対してどのような発話を行っているか、また聞き手は話し手の発話をどのように解釈して応じているかを明らかにしようとするものである。なかでも、正しい言葉や文法を話したり理解したりすること以上に、相手の発話に応じたりその意図を解釈していくという、聞き手の役割が重視されている。

このような視点からA君の場合を考えてみると、A君は聞き手としての役割にはあまり頓着せずに発話を返している可能性がある。そこで本研究では、A君が相手の発話にどのように応答しているのかに焦点を当て、以下の2つの点について検討していきたい。まず、相手の発話に応答を返しているか否かといった問題である。会話は言葉のキャッチボールに例えられることが多いが、会話では話し手が話を終えると同時に聞き手が話しはじめるといったターン・テークを繰り返していく⁵⁾。その基本的なスキルは3歳までに確立するが、就学前期を通して会話を維持する能力を発達させていき、5歳になるとトピックあたり平均5回のやりとりができるようになる⁶⁾。特に、相手からの「質問」に対しては、他の形式の発話よりも応答しやすい傾向が2歳台から見られるという⁷⁾。A君の場合は、相手の発話に応答ターンを返すことが少なく、結果的に自分からの発話が中心となるために、相手に「一方的」との印象を与えるのかもしれない。そこで、A君が相手の発話に対してどの程度応答ターンを返しているのかを検討したい。

また、ターン・テークが行われて会話が続いていても、話の内容がうまくかみ合っていない可能性もある。第二に検討したいのは、この点である。言葉のやりとりを維持し、円滑に進めるためには、お互いに

相手が理解しやすい言葉をやりとりする必要がある。たとえば、Grice⁸⁾はこれを協調の原理と呼び、大人同士の会話は原則的に①必要にして十分な量の情報を提供すること(量の公準)、②自分が信じていない情報や虚偽を伝えてはならないこと(質の公準)、③相手の発話と関連した、適切な情報を伝えること(関係の公準)、④曖昧な表現を避け、簡潔に順序立てて情報を伝えること(様態の公準)といった暗黙のルールに沿って進められると論じている⁹⁾。無論、こうしたルールに従わないこともあるが、それは意図的な場合が多く、例えば皮肉や拒否といった言外の意を間接的に伝える発話として了解可能である。しかし子どもの場合は、会話に参加するなかで次第にこうしたルールを身につけていく過程にあると考えられる。2～4歳の子どもと両親の会話を検討したPellegriniらの研究¹⁰⁾は、質と様態の公準に関しては2歳台から違反の頻度が低かったのに対して、量と関係の公準に関しては3・4歳になってようやく違反の頻度が減少することを示している。つまり、4歳頃になると基本的な意味で相手の発話とかみ合った内容の会話のやりとりが可能になると考えられる。しかし、A君の場合はこの点にあまり頓着せず、相手の発話の内容に関連した応答をすることが少ないのかもしれない。そこで、A君の応答内容が相手の発話とかみ合っているのかどうかについて、主として事例を通じて検討していきたい。

具体的な相互作用場面としては、インタビュー場面での大人との会話と、幼稚園の自由遊びでの友達との会話におけるA君の応答を取りあげ、それを仲良しのK君の場合(応答)と比較しながら検討したい。インタビュー場面を取りあげるのは、他の活動に気を取られずに会話に集中することが可能であり、インタビューアが子どもの発話を支え補うという意味で、子どもの応答を引き出しやすいと考えられるためである。その一方で、インタビューでの会話は状況の手がかりが少なく、また基本的にはインタビューアの関心に沿って会話が進められることが多いという特徴もある。そこで、A君にとって日常的で、なおかつ相互作用への動機づけが高いと思われる、仲良しのK君との自由遊び場面での会話についても検討する。なお、K君はA君と同時期に入園して同じクラスになり、本研究の時点では5歳5ヶ月であった。A君とは2学期半ばから親しくなり、よく一緒に遊んでいた。担任保育者によれば、K君はA君のような意味で気になるところはなく、「どちらかといえばあまり自分を出せないタイプだが、A君と遊んでいるときはむしろ自己主張

が盛んである」ととらえていた。

インタビュー場面でのやりとりの検討

対象データ：

友達についてのインタビューを行い、その会話をテープレコーダーで録音し、発話を中心に逐語的に書き起こした。入室から退室までのインタビュー時間はA君が約6分、K君が約18分であった。

分析1：応答率の検討

ここでの発話とは基本的に、他者の発言によって話者が交替されるか、2秒以上の沈黙が続いた場合に1ターンと数えた。そして、相手の発話に対して何らかの言語的応答を行ったかどうかという観点から応答率を求めた。

その結果、応答率はA君が95%、K君が88%であり、ともに非常に高かった (Table. 1)。なお、質問への応答率はA君・K君ともに100%であり、インタビューアからの質問数はA君に対して28、K君に対しては52であった。したがって、相手からの質問という社会的な要請が明確なインタビュー場面では、A君・K君ともに相手の発話に対しては極めて高い確率で応答を返しながら、会話を続けていることが明らかになった。

Table. 1 A君とK君の各場面における応答率

	相手の発話	本人の応答	応答率
インタビュー A君	57	54	95%
インタビュー K君	99	87	88%
自由遊び A君	104	87	84%
自由遊び K君	115	87	76%

注) 応答率は小数第一位を四捨五入した

分析2：応答内容の検討

インタビューアからの質問に対する応答内容に焦点を当て、関連性の高い応答がどの程度見られるかを検討した。関連性の高い応答とは、相手の発話の文字どおりの言葉だけでなく、相手の発話がいわんとして内容や求めている情報に直接的に関連し、それゆえ相手にとって容易に了解可能であるかどうかを意味している。したがって、言外の意として間接的に相手の発話に応じる応答は、ここでは関連性の低い応答とした。なお、質問に対して「わからない」「知らない」

という応答は、質問という会話の意図に協調的という意味で適切な応答に分類した。

その結果、K君もA君も質問に対する応答の大多数は関連性の高い内容であり、関連性の低い応答が占める割合は、K君は2%であるのに対して、A君は25%とやや高めであった。では具体的に、関連性の低い応答にはどんな内容があるのだろうか。まず事例1で、K君の場合を見てみよう。

【事例1】 K君へのインタビュー

(K: K君/I: インタビューア)

- 1 I: M君と遊びよる時に、M君のこといいな、好きだなんて思う時あるかな?
- 2 K: お寿司屋とかして、一緒に遊んだりするとき。
- 3 I: じゃあT君のこといいな、好きだなんて思うことはある?
- 4 K: A (仲良しの友達) に変なことする時もあるしね。

よく一緒に遊ぶお友達のことを「好きだと思う時はあるか?」という質問に対して、K君は下線部4Kで関連性の低い応答をしている。つまりこの応答は、質問に対して直接答えるものではない。しかしながら、4Kの回答は「(仲良しの) A君に変なことすることもあるため、T君のことを好きとはいえない」という言外の意を伝えているという解釈が可能であり、間接的には「T君のことを好きかどうか」といった質問の意図には関連した内容であると考えられる。K君の関連性の低い応答パターンには、このようなタイプが多い。では、A君の場合はどうか、事例2を見てみよう。

【事例2】 A君へのインタビュー

(A: A君/I: インタビューア)

- 1 I: そうか。じゃあUくんは優しい子かな?
- 2 A: 15番よ。
- 3 I: (戸惑いつつ) ああ15番なんやU君。よく知っとるな。
- 4 A: W (クラスメートの友達) は8。
- 5 I: W君は8、そうかー。よく覚えとるな。

ここでの質問の意図は、友達のことを優しいと思うかどうかといった、他者の性格特性についてのA君のとらえかたを問うものである。これに対してA君は、下線部2Aで「(U君は) 15番よ」といった関連性の低い応答をしている。この応答は質問の意図とは無関係であるため、質問者は戸迷っており会話としては内容が全くかみ合っていない。この種の関連性の低い応答はK君には見られず、A君に特徴的なものである。また、A君とK君の応答パターンでもうひとつ異なるのは、K君には「わからない」という応答が見られるが、A

君には見られないという点であった。

どうして、A君にはこのような特徴的なやりとりが見られるのだろうか。A君の立場から考えてみると、A君はちぐはぐな応答を通じて質問の意図が「わからない」あるいはそれに「応じたくない」というメタ・メッセージを、暗に意図的に伝えようとしていると解釈できるかもしれない。しかし、A君の「15番よ」という応答は、「U君について」という質問の一部とは関連する内容ではあり、事例2の後半で番号に対するA君の強い興味があらわれているところを見ると、「U君」についての質問をA君なりに理解して応じようとした結果として見ることもできる。

だが、A君は大人主導のインタビューという設定場面が単に苦手なだけという可能性も排除できない。そこで、A君の応答パターンやその意味をさらに検討するために、仲良しのK君との自由遊び場面でのやりとりを見てみたい。

自由遊び場面でのやりとり検討

対象データ：

幼稚園の自由遊び場面で、仲良しのK君を含む友達とのやりとりを、ビデオカメラを用いて観察した。インタビューとほぼ同時期に観察した2つの場面・計25分を分析の対象とし、発話を中心に表情や視線といった非言語的表出も含めて逐語的に書き起こした。

分析1：応答率の検討

自由遊び場面での応答率はA君が84%、K君が76%であった。したがって、インタビュー場面よりもやや低いものの、ともに高い割合で相手の発話に応答して会話を続けていた（Table. 1）。

分析2：応答内容の検討

2つの自由遊び場面（①大型積木を建物に見たてたごっこ遊び、②おもまごとコーナーでの家族ごっこ）で観察されたA君とK君の応答発話のなかで、どのような関連性の低い応答が見られるのかを、事例を通じて検討していく。

まず自由遊びのなかでは、事例3のように、A君とK君が互いに関連性の低い応答を返しつつ、ターンテークを続ける場面がよく見られた。

下線部3 K～8 Aのやりとりを見ると、ふたりは相手の発話意図とは関連性の低い応答を行っている。しかし同じ関連性の低い応答であっても、直前になされた相手の発話との関係でみると、ふたりの応答には大きな違いがある。まず、K君の直前になされたA君の

【事例3】 大型カラー積木を建物に見立て、A君とK君がごっこ遊びをしている。

(A：A君/K：K君)

- 1 A：ぼく、ここでええよ。(と、Kの座っている場所を指差す)
K君、ここへ。(Kに今いる場所を空け、隣に移動するよう指示する。KはAの指示に従って、隣に移動する。)
- 2 A：ぼくこっちいくね。(AはKに空けてもらった場所には行かず、別の積木のほうに登る) ぼくは宿題があるけん。
- 3 K：ここんち(この家)って、いいですね。(Aに共感を求める)
- 4 A：中に入って、宿題。
- 5 K：いいですね。
- 6 A：ぼく中に入って。
- 7 K：いいですねー、いいですねー。(Aの顔を覗き込んで、三たび共感を求める)
- 8 A：だめ、ぼくはここなん。(先ほどの1 Aで、Kに空けてもらった場所を指さす)
- 9 K：あーもう、どこに居てもええんよ。(不満気につぶやく)

発話（2 A、4 A、6 A）で、A君は「ぼくは宿題がある」と自分の状況を述べている。このように、自分や周囲の状況について情報を与える機能を持つ発話のことを、Halliday¹¹⁾は「陳述」と呼んでいる。陳述は対他的な意図が必ずしも明確ではないため、事例のようにたとえK君がA君の陳述に関連した応答を返さなくても、さほど会話には支障がない。ところがA君の直前になされたK君の発話（3 K、5 K、7 K）に目を移すと、「ここは、いい家ですよ」と相手に共感を求めている。このように、相手に情報を要請する機能を持つ発話は、対他的な意図がより明確であるために、応答を行う必然性が相対的に高い。また発達的にも、「陳述」よりも、例えば質問といった情報を「要請」する機能が明確な発話のほうが、関連した反応が早くから見られるという⁹⁾。

しかしA君の場合、K君が何度にも渡って共感を求めているにも関わらず、それに応じるか、または異議を唱えるといった、相手の発話意図に関連した応答を全く行っていない。それどころかK君の「いい」という言葉を「良い(家)」という意味ではなく、「座ってもいいか」という許可を求める意味と取り違い、最終的には相手の発話意図とは無関係な文脈で「だめ(8 A)」と拒否してしまう。K君は、A君とのこうした話の行き違いについて取りたてて指摘はしないものの、明らかに気分を害している。A君に見られるような、相手からの要請に対するこの種のちぐはぐな応答は、K君にはほとんどみられない。では葛藤場面のように、

【事例4】 おままごとコーナーで、A君・K君・Yちゃんが家族ごっこをしている。K君の粘土板がYちゃんの粘土板にぶつかるのを見て、A君がK君に対して繰り返し注意をしている。

(A:A君/K:K君/Y:Yちゃん/***:聞き取り不能)

- 1 A: K、やめろ。(注意する)
- 2 K: あーもう、ブツブツ言うな！(怒って、机を叩いて立ち上がる)だめ言ったらせんよ*** (身を乗り出して、強く言う)
- 3 A: じゃあK、今日お出かけ、会社、あーもう会社行きや
- 4 K: 会社?(戸惑ったように、あたりを見渡す)
- 5 A: だってもう、8時過ぎてるよ。
- 6 K: 俺の会社は9時からや。(反論する)
- 7 A: 9時も過ぎてるけど。(時計を見て真顔で言う)
- 8 K: お前うるさいな。(困ったように言う)
- 9 A: 時計見よって、ほら。(壁の時計をさす)
- 10 K: もう、今日は9時からなの。(時計に目を見て、苛々したように言う)

社会的要請が明確な状況ではどうだろうか。事例4をみてみよう。

葛藤場面でも、K君の脅迫(2K)に対してA君は「会社へ行きなさい(3A)」といった、相手の発話の意図とは無関係な応答を返しており、K君は突然の話題の転換についていけずに面食らって意味を聞き返している(4K)。つまり、A君は関連した応答が強く要請されるような葛藤状況でも、相手の発話意図と無関係なちぐはぐな応答を行っているのである。これに対してK君の場合は、A君からの命令(1A)に応酬する(2K)という、関連性の高い応答を行っている。しかしA君にとって、こうした応答ボタンは葛藤を切り抜けるための効果的な方略となっているようにも思われる。事例5の葛藤場面を見ながら、さらに考えてみよう。

K君はわざとYちゃんの粘土板を落としたわけではないのに、A君は何度もK君を非難している。そんなA君への対応に困ったYちゃんとK君が「先生に(A君のことを)訴えに行くぞ(4Y、5K)」とA君を脅迫すると、A君は「俺が(かわりに)言いに行くわ(7A)」と、K君達の発話意図とは関連しない応答を行っている。このA君の応答は、「A君が自分のことを自分で先生に訴えに行く」という意味になってしまうので、内容的にはちぐはぐである。A君はさらに突然、「(粘土版は)Z君が壊した(10A)」「Zがここで遊んでいた(11A)」と事実と反することが誰の目にも明らかな、関連性の低い応答を行っている。K君はこれをA君の「うそ」ととらえ、これ以降はA君が何を言っても無

【事例5】 おままごとコーナーで、A君・K君・Yちゃんが家族ごっこをしている。K君が間違っYちゃんの使っていた粘土版をひっくり返してしまい、A君がK君を強く非難する。

(A:A君/K:K君/Y:Yちゃん/***:聞き取り不能)

- 1 A: あー、Yの！(K君が間違っYちゃんの粘土板をひっくり返したのを見て、非難する)
- だめだ、ここじゃないと。(机上にあるK君の粘土板を乱暴に押しやり、Yちゃんのために粘土板を置く場所をあげようとする。)
- 2 K: うるっせーなー。(粘土をこねながら)
- 3 A: Yちゃんに謝りなさい！(落した粘土板を拾いながら強く要請する)
- 4 Y: ねえねえ、先生に言おう。(一方的にK君を攻めるA君への対応に困って、K君に提案する)
- 5 K: 先生に言おうや。(提案に応じて、Yちゃんに言う)
- 6 Y: うん。(立ち上がって、K君に答える)
- 7 A: 俺が言うわ。(ふたりに向かって、提案する)
- 8 K: Aは言わんでええ。(苛々したように棒で粘土を叩きながら、反論する)
- 9 Y: そうよ、***。(K君の意見に同調する)
- 10 A: Z、Zが壊しよったんよ。(粘土版を落としたのはZ君だとYちゃんに訴えるが、Yちゃんは驚いたように後ずさりして応答しない)
- 11 A: K、K、Zがここで遊びよったんよ。(今度はK君に訴えるが、K君はA君の言葉を無視して、おもちゃの携帯電話で誰かと話しているふりをする)

視をし続ける。A君のちぐはぐな応答ボタンは、遊びを続けるうえで必ずしも効果的な方略とはならないどころか、逆に遊びを破綻させたり、相手との関係を悪化させてしまう結果になる場合もある。

その一方で、事例6のように、A君に特徴的な関連

【事例6】 A君とK君がテラスで大型カラーボックスをつなぎ合わせ、建物に見たててごっこ遊びをしている。

(A:A君/K:K君)

- 1 K: もう、Z(他児の名前)のおうちはなくなつたけん。俺と二人暮らしのおうちになった。一回おらんようになったらもう、変わってしまう。
- 2 A: 一階はおばけがおるよ。
- 3 K: ほうよ。おばけがおるよ。
- 4 A: 二階はね、二階は泥棒よ。
- 5 K: ほうよ。(笑う)
- 6 A: 三階なんやもん。ねー。
- 7 K: ほうよ、3階やないといけんのよ。
- 8 A: 3階のところまで。3階ちゃんと上がらんとだめなんよ。

性の低い応答パターンが、場を盛り立てる役割を果たしている場面も見られた。

やりとりのなかで、K君の「一回」という発話（1 K）をA君は「一階」の意味と取り違えて（2 A）、関連性の低い応答を行っている。しかし、その内容が「一階はお化けがいるよ」という豊かなイメージを持つ発話であったため、K君のほうが「ほうよ」とそれに応答を返してやりとりが続き、「2階は泥棒（4 A）」というようにイメージはさらに大きく膨らんでいく。そうしたやりとりを通じてふたりの連帯感が強まり、遊びがより楽しいものとなっている。

考察

A君の応答パタンの特徴

「会話が一方的」というA君のやりとりを検討してみると、まずターン・テークングに関しては、A君はK君と同程度の割合で相手の発話に対して応答ターンを返していることが明らかになった。すなわちA君は、質問が中心のインタビュー場面だけでなく、友達との自由遊び場面においても、ターン・テークングをしながら相手と会話を続けていることがわかった。このため、A君は相手の発話に応答しないために「一方的」との印象を与えているわけではない。

しかし、応答内容の関連性を検討してみると、相手からの質問・要求・命令といった社会的なメッセージがはっきりした状況であっても、A君は相手の発話意図に直接的には関連しないような応答を行う機会が多かった。A君との会話をキャッチボールに例えるならば、相手が自分に投げ返して欲しいと思って投げかけたボールを、A君は全く違う方向に投げてしまう場合があるのである。そうした要請に対するA君のちぐはぐな応答が、相手に「一方的」との印象を与えてしまうのではないかと考えられる。

A君の応答パタンが伝えるメタ・メッセージ

要請に対するこの種のちぐはぐな応答は、相手との葛藤の度合い深めてしまう場合があるにもかかわらず、なぜこのようなやりとりが見られるのだろうか。本論では、A君の特徴的な応答パタンが持つ意味を、A君がどんなメタ・メッセージを伝えようとしているのかという視点から考えてみる。例えば、A君は相手の発話が「わからない」ということを意図的に伝えているのかもしれない。しかし、もしそうであれば、K君のように「わからない」と言ったり、聞き返すほうが容易である。また、相手の発話に「応じたくない」

ことを伝えようとしているという見かたもできるだろう。しかし、それならばK君のように要請に異議を唱えたり、無視するほうが効果的であると思われる。A君の表情や口調を見る限り、相手に異議を唱えているとは考えられない。

そこで注目したいのが、内容がちぐはぐであってもA君は常に応答ターンを返して、やりとりを続けようとしているという点である。結果的に相手の意図と行き違ってしまう危険性があるにもかかわらず、A君がこの種の応答を返していることを考慮すると、A君は相手とやりとりを続けたいというメタ・メッセージを伝えようとしていると考えられるのではないだろうか。例えば事例4や5の葛藤場面でも、むしろ葛藤を回避して何とか相手と関わりを持ち続けようとするほどの、ちぐはぐな応答パタンが生じてしまうと見ることができる。

一方、周囲の者はA君の応答パタンからどのようなメタ・メッセージを読み取っているのだろうか。A君の関連性の低い応答は「協調の原理」を前提とした会話のルールを無視した内容である。従って周囲の者は、こうしたA君の応答を応答パタンの問題としてではなく、「マイペース」「一方的」など「協調的でない」といったネガティブな性格や意図の問題として、とらえてしまう傾向があるのではないか。A君の立場から見れば、関連性の低い応答は相手の要請を拒否するものではないし、むしろ関係を維持しようとした結果であるかもしれない。しかし、相手は自分の発話意図と無関係なA君の発話を聞いて、「伝わった」という実感が持てずに苛々してしまうのである。このように、相手からの要請がはっきりした場面であるほど、A君の伝えるメッセージと相手が受け取るメッセージの「ずれ」は大きくなり、関わること自体が難しくなってしまう。

A君の応答パタンの背景

A君の応答には、相手の発話意図との関連性が低いものが目立った。その傾向はさほど極端ではないが、A君には相手の意図に応じることがやや難しいのではないかと考えると、その原因としていくつかの可能性が考えられる。まず、相手のメッセージをどう受けとめてよいかわからないとしたら、発達的に他者の意図理解が難しいのではないかという見かたができる。あるいは、相手の発話の意図と無関係な一部に応答するような応答は、言葉の意味理解や、記憶のスパンの在り方を反映しているかもしれない。また、性格的にせっかちで、自分のペースで行動したいタイプなのではないかという見かたもできるだろう。例えば、A君は興

味が次々と移りやすく、何かを始めると自分の活動に夢中になってしまう傾向があるために、結果的に周囲の状況が目に入りにくいのかかもしれない。A君の応答の背景にある原因を特定することは容易でないが、考慮することは重要な意味を持つ。その点については、今後さらなる検討が必要である。

関わりへの示唆

最後に、A君のような特徴を持つ子どもと関わる際に配慮すべき点について考えてみたい。まず、A君のような応答パターンに出会うと、関わる側の「伝わらない」という思いから、無意識のうちに、相手の応答パターンの問題を「自分勝手」といった相手の性格の問題としてとらえてしまう傾向がある。しかし、本論で見てきたように、相手は逆にコミュニケーションを続けたいというメッセージを送っている可能性もある。関わる側としては、そうした無意識のうちの解釈パターンがあるということを意識化することで、相手が伝えるメタ・メッセージにより接近していくことが重要であると思われる。

さらに、A君のように語用が苦手な子は会話をスムーズに運ぶことが難しいため、友達との関係を維持するうえで困難を抱えやすい¹²⁾。相手からの要請をめぐるA君とK君のやりとりをみても、同様な傾向がみとれる。しかし自由遊びの中では事例6のように、A君の一見ちぐはぐな応答パターンが、「ふざけ」¹³⁾に似た面白さとして、K君に積極的に受け入れられる場面もみられた。本論を通じて当時を振り返るなかで、担任保育者は「A君は追いかけっこが好きだったことを思い出した。当初は私がA君を追いかけて遊ぶことがあった。やりとりが成立しにくいなあと気になりだしてから、なんとか言葉でつながろうと、A君の興味のあることを聞いてみたり、A君が話題を転換するのに必死でついでにこうしたりしていた。今思えば4歳のあの時期に、言葉が必要ないコミュニケーションの楽しさをもっと味わわせるべきだったかもしれない」と述べている。A君の応答をルール違反としてとらえ、適切な言い回しを伝えようとするだけでなく、否定せずにユーモアとして上手に受けとめ、仲間関係のなかで楽しめるやり取り遊びを経験できる機会を増やしていくという視点も大切ではないかと考える。

引用文献

- (1) 藤崎春代・西本絹子・浜谷直人・常田秀子 保育のなかのコミュニケーション—園生活において

ちょっと気になる子どもたち— ミネルヴァ書房 1992

- (2) 野田(松井)淳子・深田昭三 保育のフィールドにおける発達支援—対応の難しい子どもと保育者の変容をうながしたものの— 乳幼児教育学研究, 第11号, pp.33-42. 2002
- (3) 秦野悦子 会話が成立するときしないとき 秦野悦子・やまだようこ(編) コミュニケーションという謎 ミネルヴァ書房 1998
- (4) 大井学 言語発達の障害への語用論的接近 風間書房 1995
- (5) Sacks, H., Schegroff, E., & Jefferson, G. A simplest systematics for the organization of turn taking in conversation. *Language*, 50, pp. 696-735. 1974
- (6) 深田昭三・倉盛美穂子・小坂圭子・石井史子・横山順一 幼児における会話の維持: コミュニケーション連鎖の分析. *発達心理学研究*, 第10巻, 第3号, pp.220-229. 1999
- (7) Bloom, L., Rocissano, L., & Hood, L. Adult-child discourse : Developmental interaction between information processing and linguistic knowledge. *Cognitive Psychology*, 8, pp. 521-552. 1976
- (8) Grice, P. 論理と会話 清塚邦彦(訳) 勁草書房 1998 (Studies in the way of word. Cambridge, Harvard University Press. 1989)
- (9) 津田早苗 談話分析とコミュニケーション リーベル社 1994
- (10) Pellegrini, A. D., Brody, G. H., & Stoneman, Z. Children's conversational competence with their parents. *Discourse Processes*, 10, pp. 93-106. 1987
- (11) Halliday, M. A. K. An introduction to functional grammar (2nd ed.). London : Edward Arnold. 1985
- (12) Owens, R. E. Language disorders : a functional approach to assessment and intervention (3rd ed.). Boston, MA. : Allyn & Bacon. 1999
- (13) 掘越紀香 ふざけ行動にみるちょっと気になる幼児の園生活への対処. *保育学研究*, 第41巻, 第1号, pp.71-79. 2003

謝辞

研究にご協力いただきました愛媛大学教育学部附属幼稚園の子どもたちと先生方に、心より深くお礼を申し上げます。また論文の作成にあたり、お茶の水女子大学の無藤隆先生、愛媛大学の深田昭三先生には貴重な助言、ご指導をいただきました。記して感謝申し上げます。